

マラヤにおけるアズハル留学の主流化と 宗教学校の近代化に関する一考察

久志本 裕子

東京外国語大学大学院地域文化研究科

要旨

本稿の目的は、20世紀半ばのマラヤ(マレーシア)を事例に、アズハル機構の近代化とアズハル留学の主流化がイスラーム宗教学校の近代化に直接的、間接的に深く関連してきたことを明らかにすることである。スンナ派イスラームの知の拠点であるアズハルへの留学を通じた国際的ネットワーク形成および思想の伝達についての先行研究は多いが、アズハル機構の制度的変化自体が各地の宗教教育に与えた影響についてはほとんど考察されていない。宗教教育の近代化は一般に植民地支配あるいは近代国家による宗教管理の重要な施策とされるが、1960年代までのマレーシア政府はイギリスの教育政策の影響を残し、宗教学校に対して基本的に不干渉の立場をとってきた。しかし、民間のイスラーム学校はアズハルをモデルに自主的に宗教学習を「学校」の形式に再編し、結果として後の政府によるカリキュラムの統一化、宗教学校国立化等の積極的管理政策への素地を用意することとなった。

キーワード

アズハル機構、近代化、留学、マラヤ(マレーシア)、イスラーム宗教学校

1. はじめに

本稿の目的は、20世紀半ばのマラヤ(マレーシア)を事例として、アズハル機構の近代化とアズハル留学の主流化が、留学生の出身国におけるイスラーム宗教学校¹の近代化に直接的、間接的に深く関連してきたことを明らかにすることである。考察の中心となる時代は、アズハルのマラヤへの影響が顕在化する1930年代から政府の介入が強まる1970年頃までとする。

本稿で考察する「近代化」とは、イスラーム知識伝達の機関が、その組織のあ

り方や教育内容において国家の教育制度に近似していく過程を指し、そこには組織の官僚制化、教師の専門職化、教育内容における非宗教科目の重点化などが挙げられる。特に20世紀以降のイスラーム世界各地で顕著となったこのような変化は、単なる形式にとどまらず、学ぶべき価値のある知とは何か、それを誰が教えるべきか、といった知識伝達に関する思考自体を変化させる力を持ち、ムスリム社会における学識者(ウラマー)の役割や権威の所在の変容と密接に関連する極めて重要な現象である。

宗教知識伝達の近代化の動力には通常、西洋知識、制度の導入による西洋との対抗を目指す近代イスラーム改革主義と、イスラームの管理を目指す政権の力の二つが働いている。ムスリム社会に近代的行政機構を持ち込んだ植民地支配者、あるいはそうした制度を引き継いで独立した近代国民国家にとって、イスラーム教育およびそれを担うウラマーの活動を制度化し、管理可能にすることは重要な関心事とされてきた²。それにはイスラーム法廷の制度化や寄進財(ワクフ)等のウラマーの財源の国家管理などがあるが、イスラーム知識伝達の近代化もまた、これらと密接に関連して進んだ。

アズハル機構は970年にカイロに建設されたモスクを中心に、大学、中・高校、ウラマー組織などを備えた総合的な機関であり、スンナ派イスラーム世界の知の中心として国際的に権威を認められていた。特に20世紀以降スンナ派イスラーム世界の全域から留学生が集まり、留学生出身国に多大な影響を持っている。このアズハルの近代化もまた、近代イスラーム改革主義とイスラーム管理の必要性の二つの動力で進められてきた。

一方、18世紀末からイギリスによる保護国化が進められたマラヤでは、宗教とマレーの慣習に関する事項は各州の統治者であるスルタン等の首長に委ねられ、イギリスは少なくとも直接的には宗教に干渉しないという立場を取った。このため、マラヤにおけるイスラーム宗教教育の発展は私人、あるいは各州の首長の下に設置された宗教委員会等によって担われてきた。連邦政府の宗教教育への干渉は1957年の独立前後に宗教学校への補助金の支給を検討し始めたことで緩やかに始まったが、国家統一試験に対応するカリキュラムの導入などの本格的な干渉は1970年前後まで見られなかった。それにもかかわらず、マラヤではこのような連邦政府の干渉による制度化が進む以前から、アズハルをモデルとする宗教教育の発展を目指した個々のイスラーム指導者の自主的な努力により、イスラーム教育の近代化、制度化が進められてきた。このため、1970年代に連邦政府が宗教学校の近代化に本格的に乗り出した頃には、アズハルの近代的制度に合わせる形で自主的に官僚制化、標準化がかなりの程度進められていた。アズハルの近代化とアズハル留学の主流化は、宗教学校の自主的な近代化における最も重要な刺

激ということができるのである。

イスラーム世界各地からのアズハル留学とその出身地域への影響については、これまで特に政治的思想や、運動の伝播という視点で多くの研究者の関心を集めてきた³。マラヤからの留学についても同様に、特にナショナリズム運動の伝播という視点から論じた Roff⁴ や、改革主義や汎イスラーム主義の影響を含め中東との人的、思想的交流を総合的に描いた Ridzuan Othman⁵ 等の先行研究がある。しかし、イスラーム管理政策の下で進展したアズハルの近代化が、マラヤにおける宗教教育の近代化、制度化にいかなる影響を及ぼしたかについては論じられていない。

これに対して本論では、マラヤからのアズハル留学の主流化が、宗教学校のアズハルに倣った自主的な近代化を促し、その結果国家による宗教教育の標準化、管理の強化を容易にしたことを論じる。これにより、国家を超えたイスラームの展開につながるかに見える留学による国際的知の交流が、一方では国家による宗教知識伝達の標準化と管理の進展をもたらしたという、一見矛盾するような結末が明らかになる。

2. アズハル機構の近代化とマラヤにおけるアズハル留学の主流化

2-1 アズハル機構の近代化

アズハル機構は、970年に設立されたモスクを中心として、19世紀に至るまでハラカ形式⁶での古典的宗教書の読み上げによるイスラーム知識伝達の場として機能してきた。19世紀末に始まるアズハルの近代化は、ムハンマド・アブドゥーによって始められ、ナセルによって完結されたとされる⁷。近代イスラーム改革主義の主要な論客として世界に影響を与えたムハンマド・アブドゥーは、1870年代にアズハルに学び、在学中から新科目の導入などアズハルにおける教育の改革を訴えていたが、1895年以降はアズハル運営委員会の一員として特に制度面における本格的な改革に乗り出した。アズハルではこれ以前から緩やかに改革が進められていた。1872年には教師の任命の必須条件として試験制度が導入された。1888年には数学、幾何学、地理等いくつかの近代的科目が導入されたが、アブドゥーらが必要性を主張していた預言者伝、宗教道徳、ハディース専門用語、習字、作文、討論、暦計算などは含まれなかった⁸。しかし、アブドゥーの影響力が強まった1896年に通過した法ではこれらの多くが導入され、15歳以上の男子に対する8年間の中等教育課程と試験、修了証書(*al-shahāda al-ahlīyah*: Ar)⁹ およびさらに4年間の高等教育課程と試験、修了証書(*al-shahāda al-ālimīya*: Ar)が定められた。

だがより本格的な近代化が進んだのはアブドゥーの死後であり、1911年に通過した法は特に重要であった。Eccel は1911年の改革期における変化を「官僚制化」

と特徴付けている¹⁰。この法ではエジプト各地の主要宗教教育施設がアズハルを中心とするヒエラルキーに編入され、全体の教育課程は10歳から始まる初等、中等、高等各4年間に整えられた¹¹。

1922年にエジプトが王国として独立して以降、王と政府、イギリスの対立関係の中で、アズハルの管理を求める政府によりワクフ収入の管理が進められた。ウラマーの自律性を守る経済的基盤を切り崩す力を持つこの政策は、ナセル政権下の1954年に完結した¹²。

1930年に制定された法は、アズハルの近代化において1911年法と同様に重要なものである。Eccelは1930年代の変化を、卒業生の就業を重視して教育制度、内容を大幅に改編したことから「専門職化」と特徴付けている。四年間の高等教育(‘Āli)は従来のモスク(*jāmi‘*: Ar)に代わり大学(*jāmi‘a*: Ar)の名を冠し¹³、高等学位(‘ālīya: Ar[かつての *ālīmīya*: Ar])を与えるようになった。また、大学院レベルとして専攻科(*takhaṣṣus*: Ar)が設置され、専門分野の名を冠した学位(*ālīmīya*: Ar)が与えられることになった。*ālīmīya*の学位には修士、博士の二種があったが、後に博士の学位 *ductūra* [Ar]、修士の学位 *majister* [Ar]と名を変えて他の国立大学等と同様の構造を持つようになった¹⁴。初等、中等課程は、初等(*ma‘āhid ibtidā‘īya*: Ar)4年、中等(*ma‘āhid thanawīya*: Ar)5年に再編されて中等修了時に修了資格(*shahāda al-thanawīya*: Ar)が与えられるようになり¹⁵、初等、中等では全体の30%以内で世俗科目が増加し、一般教育重視の傾向が明白になった¹⁶。

1952年のエジプト革命以降、アズハル大学および付属学校は、ナセル政権により完全に政府管轄下に置かれ、国家の教育制度の中に位置づけられた。アズハルの予算はワクフ収入を含む全体について政府の省庁を通じて配分されるようになり、その額は大幅に増加した¹⁷。ナセル政権の下で学校教育と政府雇用が大幅に拡大され、高等教育への進学条件として統一試験も整備されたことを背景に、これまで宗教に大きく傾倒していたアズハルが卒業生の雇用問題を克服し、より多くの学生をひきつけるため、非宗教教育をさらに大幅に取り入れる必要が生じた。1960年にはアズハル大学にイスラームとアラビア語に加え、商学部、工学部、農学部、医学部が設置された。このような中で新たに制定されたアズハルの1961年法では、初等部は準備課程(*ma‘āhid i‘dādīya*: Ar)と名を変えて4年間、中等部(*m‘āhid al-thanawīya*: Ar)は5年間と定められ、89条にはアズハル中等修了資格が他のエジプトの大学の入学資格として認められることが盛り込まれた¹⁸。これによって、アズハルは完全に国家の教育制度内の教育機関と同等となった。

アブドゥのアズハル近代化案以降、アズハルは次第に学校教育制度に沿った初等・中等学校と大学となるべく制度と教育内容を整え、同時にウラマーの私的な収入源であったワクフ等の国家管理が進んだことにより、ウラマーは専門的教師

として官僚制度に組み込まれることとなった。そしてナセル政権下の1961年法によって、アズハルの教育制度は完全に国家の学校教育制度の一部として再編されたのである。

2-2 マラヤにおけるアズハル留学の主流化

マラヤにおけるイスラーム知識伝達には、エジプトにおけるアズハルのような中心的拠点は存在しない。19世紀末から20世紀初頭のマラヤにおいてもっとも高度なイスラーム学習の場は、特にマレー半島北部に散在する「ポンドック (*pondok*)」と呼ばれる寄宿塾であった。「ポンドック」は通常一人の「トッグル (*tok guru*)」と呼ばれるカリスマ性を持つ師により主宰されるが、トッグルの多くはメッカのマスジド・アル・ハラーム周辺で学んだ経験を持っていた¹⁹。メッカにはマレー世界²⁰出身のウラマーが数多く滞在していたため、ポンドックでの基礎的学習を終えた多くの学習者が、短期間の経験として、あるいは10年、20年に及ぶ知の探求のためメッカに渡った。19世紀後半にはこのようなメッカ帰りのウラマーが、マレー半島北部を中心に数多くのポンドックを開き、メッカで学んだ宗教書などを教授した。

19世紀末から20世紀初頭になると、メッカへ渡った後カイロへ赴き、アズハル・モスクにて学問を深めるマレー世界出身者が見られるようになった。その先陣を切ったのは、1870年代にアズハルに学んだタイ南部出身のアフマド・ザイン・ファターニー²¹とされる。1890年頃になると、アズハルに学んだ際に、近代イスラーム改革主義に強く影響を受け、マラヤに戻り改革主義思想を広める活動を行うウラマーが現れた。その代表的人物と言えるターヒル・ジャラルディン²²は、マラヤで初めてのイスラーム雑誌として改革主義を広めた『アル・イマーム』の出版、およびマラヤ最初の近代的イスラーム学校マドラサ・アル・イクバルの設立に寄与した。1910年前後にアズハルに学びマラヤに戻ったその他のウラマーも、次第に多くが学年制、試験による進級制度など近代的学校に似た性質を持つイスラーム学校を設立し、そこで教えるようになった。ただし、最初期の近代的マドラサではアズハルで教えられている教科や宗教書を直接用いることはあまりなかった。

1910年代から20年代にかけて、アズハルに留学するマラヤ出身者は緩やかに増加し²³、次節で見るように1930年代以降にはアズハル留学の便宜性を意図してアズハルのカリキュラムを直接反映したマドラサが次第に増えた。カイロではマレー世界出身の学生団体が結成され、『スルアン・アズハル』、『ピリハン・ティムール』等の雑誌を発行するようになった。これらの雑誌はマレー半島に持ち込まれ、宗教学校の教師や生徒にも読まれた²⁴。

アズハルの側では、1920年代から、トルコにおけるカリフ制の廃止に伴うイスラーム世界の主導権をめぐる競合²⁵と、1919年エジプト革命などナショナリズムの盛り上がりを背景に、エジプト政府とアズハルはアズハルの影響力を世界的に強める方向性で一致し、アズハル予算の大幅な拡大と積極的な留学生受け入れ政策を取っていた²⁶。

一方、スルタン等マラヤの統治者にとっては、アズハル留学はイスラームの知の向上という点では望ましい一方²⁷、元留学生による体制批判やインドネシアとの連帯を目指す主張などは彼らの地位を脅かすものであり、こうした危険を避けるためマラヤにアズハルに代わる高等教育機関を設置することが提案された²⁸。マラヤにおけるイスラーム(あるいはムスリムのための)高等教育機関は、統治者のみならず20世紀初頭から様々なイスラーム指導者によって提案され、待ち望まれていた²⁹。

1955年のマラヤ・イスラームカレッジ(Kolej Islam Malya: KIM)設立は、こうした希望の実現であった。スランゴール州スルタン等のマレー統治者を始めとする様々な方面の支援によって設立されたこのマラヤ初のイスラーム高等教育機関のモデルは、やはりアズハル大学であった。設立当初のKIMでは準備課程(2年)、本課程(5年)が設置され、本課程5年間の修了に伴い高等カレッジ修了証書(*sijil tinggi kolej*)を授与する課程が計画された。1961年にはナセル政権によって任命されたアズハル総長マフムード・サルトゥートをKIMに招き、カリキュラムについて議論した結果、KIMの高等カレッジ修了資格がアズハル大学の学士号と同等と承認され、アズハル修士課程への進学を可能とすることが合意された。アズハルから2名の教師が派遣され、1963年には10人のKIM出身者がアズハル大学修士課程に進学した³⁰。しかし、生徒の質の低さを理由に、1962年新規入学学生以降は中等教育と1年間のディプロマへと教育のレベルが下げられ³¹、それ以降は全国の宗教学校から優秀な学生を集め、主にアズハルの学部への準備課程を提供する機能を果たすようになった。

KIMの設立は、マラヤ各地の宗教学校のカリキュラムをアズハルに合わせて標準化させる更なる動機となった。アズハル学部直接入学可能なレベルまで備えることができない多くの宗教学校でも、KIMにカリキュラムを合わせることでよりKIMを経てアズハルへ留学する可能性が拡大したのである³²。1963年にクランタンに設立されたクランタン高等イスラーム教育基金(Yayasan Pengajian Tinggi Islam Kelantan: YPTIK)もまた同様の役割を果たした。さらに、1960年代のマレー人の政府学校における教育機会の大幅な拡大による宗教学校の生き残りをかけた競合の激化、および1970年代のマレー人の高等教育機会の拡大を背景として、一般の学部への進学が不利な宗教学校からも高等教育進学の道を開く必

要に迫られたことが加わり、マレーシアからのアズハル留学生は1970年代末には3000人程と推察されるほどに増加した。この後、1980年代から90年代にかけて各州宗教委員会によるアズハル中等部に準拠したカリキュラムの統一化が行われ、さらに2000年には連邦レベルでアズハルに準拠し、認可された全国統一進学試験が始めて実施され、アズハル留学が中東留学の主流として確立された。

3. マラヤの宗教学校近代化の事例にみるアズハルとの関係

3-1 事例1 マクタブ・マフムードとクダーの宗教学校

1914年にマレー半島西北部に位置するクダー州の州都アロースターに開かれたマドラサ・ハーミディーヤは、従来のポンドックとは異なり学年制と近代的組織を持つ、マレー半島最初期の宗教学校である。このマドラサはクダー州のシェイフ・アル・イスラームを務めたワン・スレイマン・ワン・シディク(1874-1935)の発案と財産により設立された後、1922年にはクダー州政府に移管された。1937年にはスルタン家王子トゥンク・マフムードの支援により広い敷地に移転し、マアハド(またはマクタブ)・マフムードと改称した³³。ワン・スレイマンは1887年から1906年頃までメッカでアラビア語とイスラーム諸学を修めたが、アズハルで学んだという記録はない。しかし、1914年の開校にあたりアラブ人の教師をメッカから一人、アズハルから一人招いており、教科書についてもアズハルで用いられたものと特定はできないが、カイロから輸入したものが使用された³⁴。

アズハルとの関係がより明確になるのは1937年の移転以降である。1938年にはアズハル大学への留学から帰国した新校長が任命され、アズハルに基づきカリキュラムを改編し、修業年限を従来の5年から7年に延長した。1946年には第8学年が創設され、修了に伴い修了資格(*al-syahadah al-nihaiyah*)が発行され、アズハル大学に留学するに足るとされた。だが、第8学年を終えた段階ではカイロへの渡航後に課されるアズハルの入学試験に合格するのは困難であったため、1955年にさらに4年間が追加された。準備段階(*persediaan*)、前期中等(*menengah rendah*)、後期中等(*menengah atas*)の三段階、各四年の合計12年の教育課程が設定され、教育目的の一つに「生徒をアズハル大学の学部への進学に備えさせ、これを可能にすること」が謳われた³⁵。1963年になると、時代の変化への対応として、教育省の中等教育と修了試験に対応するため、非宗教科目導入と6年制³⁶への移行という大改編が行われた³⁷。

マクタブ・マフムードはクダー州最初の近代的学校の形式を持つ宗教学校として、また唯一の州立宗教学校として、クダー州の他の宗教学校のモデルとなってきた。例えば、アロースター近郊にあるマドラサ・ナフダは1946年に一人のトッ

グルにより伝統的学習を行うポンドックとして開校したが、1947年には保護者と地域社会の要請により、マクタブ・マフムードをモデルに学年制を取り入れた。初等部(*ibtidai*)4年、中等部(*thanawi*)4年の8年教育とされ、8年目には試験の後、中等4年修了資格(*empat thanawi*)が与えられた。この資格は、1967年にはクランタンのYPTIK(前述)への入学資格として認められるようになった。このマドラサは地域の支援と学費のみで運営されていたが、1962年にはクダー州宗教委員会が設立され、補助金を受給するようになった。この時点ではカリキュラム等への介入はほとんどなかったが、1971年に保護者等の要求により教育省の統一試験に準拠する非宗教科目が取り入れられ、これに伴い6年制に移行した。しかし、宗教科目に関する修了資格は依然マドラサの名において発行されており、1977年にはアズハル大学で修士号を取得した同マドラサ卒業生がマクタブ・マフムードをモデルに教育課程の整備を進め、独自に同校の修了資格を持ってアズハル大学への入学許可とする協約を結んだ。最終的にクダー州宗教局によるアズハル準拠カリキュラムと修了資格の統一化が実現したのは1994年前後のことであった³⁸。

3-2 事例2 マアハド・ムハンマディーとクランタンの宗教学校

マレー半島東部のクランタン州では1915年に宗教委員会(Majlis Agama dan Adat Istiadat Melayu Kelantan)が設立され、マスジドの運営や喜捨(ザカート)の徴収等、イスラームに関する事項を近代的行政機構に取り込んできた。その一環として、学年制、年次試験と進級制度等を持つ宗教学校「マドラサ・ムハンマディーヤ」を1917年に設立した。設立を主導したのは、メッカおよびアズハルへの留学経験を持つ、数人の宗教委員会メンバーであったが、設立時にはアズハルの教育を直接的モデルとしたものではなく、9歳から15歳の男子生徒を対象とし、3学年の教育を行うものであった。教授言語はマレー語で、教科書は主にエジプトから輸入しマレー語に翻訳したものが用いられた³⁹。

1937年、新たにアラビア語を教授言語とするマドラサ・ムハンマディーヤ・アラビア語部門(1956年にマアハド・ムハンマディーに改称)が開校した。開校にあたり、サイイド・アブ・バカル・アル=アッタースと他二名の教員⁴⁰が宗教委員会によって任命され、サイイド・アブ・バカルを中心に学習内容等の学則が決定された。この際、彼はアズハルの代表者から、アズハルの学則、教授されている宗教書、外国人留学生受け入れ要領等数点の本を贈られた。アラビア語、宗教科目および地理、算数、体育の一般科目から成る教育内容が4学年に割り振られ、各学年で2回の試験が行われた。修了時には、修了資格ではなく修了を認める文書(*surat akuan*)のみが発行されたが、学年数が次第に増加し1942年に第5

学年、1952年に第9学年まで設置され、最初の5年が初等部(*ibtidai*)、後の4年
が中等部(*thanawi*)と分けられると、中等部4年時の試験合格に伴いマアハド・
ムハンマディー修了証書(*syahadah maahad muhammadi*)が発行されるようになった⁴¹。

1955年、宗教委員会の奨学金を受けてカイロのダールル・ウルームにて学士
号を取得したハサン・イドリスが、中東の大学を修了した初めての教師として着
任した。ハサンはアズハルを参照して従来の9学年を初等(*ibtidai*, 1-3年)前期中
等(*i' dadi*, 4-6年)、後期中等(*thanawi*, 7-8年)三段階に分けると共に、修了試験
に新たな科目を導入し(表)、同校の修了資格がアズハル大学への入学資格として
認められるよう尽力した。その結果、1960年にこれが認可され、60年末には一
人目の学生が直接アズハル大学へ進学した⁴²。

1958年にはアズハル大学アラビア語学部卒の教員を加え、1960年代にはアズ
ハル大学入学資格に対応する新たな科目が次々に導入された。マレー語や経済な
どの非宗教科目もいくつか教えられるようになり、60年代初めに約500人であ
った生徒数は60年代後半には900人に増加した。1960年代に生徒数は頂点に達し
たが、70年前後からマレー人の政府学校における進学機会の拡大を背景に、ク
ランタンの宗教学校全体で生徒数が激減した。1962年にクランタン州全体で189
校あった類似の宗教中等学校は、1968年には158校、1972年には89校までに減
少した。このような状況に対し宗教委員会は1971年、州内の宗教学校共通の宗
教・アラビア語カリキュラムと統一試験をアズハルに準拠して導入し、さらに教

表 アズハル準備課程およびマラヤ(マレーシア)宗教学校教科一覧

	①アズハル 初・中1911	②アズハル 初・中1930	③アズハル 初・中1958	④マフムード (1~5年)1937迄	⑤マフムード 初・中1955	⑥ムハンマディ (1~4年)1937	⑦ムハンマディ (1~9年)1960
宗教 関連	聖典朗誦、聖典 解釈、伝承、神 学、法学、法学 原理、道徳、預 言者伝	聖典朗誦、朗誦法 法、聖典解釈、伝承、神 学、法学、法学原理 道徳、預言者伝	聖典朗誦、朗誦 法、聖典解釈、伝 承、伝承用語、神 学、法学、法学原理	聖典朗誦、朗誦 法、聖典解釈、 伝承、神学、法 学	聖典解釈、伝承、伝 承用語(選訳)、神学、 法学、法学原理、相 統法、道徳、イスラ ム史	聖典朗誦、聖典 解釈、伝承、神 学、道徳、預 言者伝	聖典朗誦、聖典解 釈、伝承、伝承用語、 神学、法学、法学原 理、神秘主義、道徳、 イスラーム史
アラ ビア語 関連	統語、語形、修 辞(表現・装飾・ 語義)、聴解、 作文、読みと暗 誦、論理と討論 法、習字	統語、語形、修 辞(表現・装飾・ 語義)、聴解、 作文、読みと暗 誦、論理と討 論法、習字、アラ ブ文学	統語、語形、修 辞、韻文、聴解、 読みと暗誦、論 理と討論法、習 字、アラブ文学	統語、語形、修 辞、アラブ文学	アラビア語、統語、 語形、修辞、表現、 装飾、語義、聴解、 作文、読みと暗 誦、韻文、習字、アラ ブ文学、翻訳	統語、語形、聴 解、作文、読み と暗誦、習字	統語、語形、修 辞、韻文、作文、 読みと暗誦、論 理、アラブ 文学
その他	歴史、地理、物 理、自然史、暦 計算、算数、幾 何、衛生、図画	歴史、地理、科学(物 理、化学、自然史)、 初等科学、算数、幾 何、技術、衛生、図 画、国民性	歴史、地理、英語、 物理、化学、生物、 算数、幾何、技術、 衛生、図画、国民 性、軍隊訓練	歴史、暦計算、 算数、演説	地理、歴史、暦計算、 算数、教育学、体育、 衛生、教育学入門、 初等科学	地理、算数、体 育、演説、宗教 歌	地理、歴史、マレー シア語、マレー文 学、暦計算

教科名一覧(日本語五十音順) ※原語はアラビア語表記に従い、マレー語には[: M]と表記。斜体は初等部のみ、太字は中等部のみ。
アラビア語(al-'arabiya)、アラブ文学(adab al-lugāt)、暗誦(mahfūza)、イスラーム史(sejarah Islam : M)、韻文(arūd)、衛生(al-tarbiya al-shīha)、
演説(khiṭāb)、科学(ulūm)、化学(kīmīyā)、技術(handasa)、軍隊訓練(al-tarbiya al-'askariya)、語義(ma'āni)、国民性教育(al-tarbiya al-waṭaniya)、
語形(ṣarf)、暦計算(falāq)、作文(inshā)、算数(hisāb)、神学(tawhīd)、自然史(al-tārīkh al-tabī'a)、宗教歌(nashīd)、修辭(balāga)、習字(khat)、
初等科学(mab'ādī al-'ulūm)、神秘主義(taṣawwuf)、図画(rasm)、聖典[クルアーン]解釈(tafsīr)、生物(hayā)、装飾(bādī'), 相統法(farā'id)、
体育(al-riyāḍ al-badaniya)、聴解(imlā)、伝承[ハディース](hadīth)、伝承用語(muṣṭalah al-ḥadīth)、統語(nahw)、討論法(adab al-baḥth)、道徳
[宗教道徳](akhlāq)、表現(bayān)、物理(tabī'a)、法学(fiqh)、法学原理(usūl fiqh)、翻訳(terjemah : M)、マレーシア語(bahasa Malaysia : M)、
マレー文学(kesusasteraan Melayu : M)、歴史(tārīkh)、[クルアーン]朗誦法(tajwīd)、論理(manṭiq)、預言者伝(al-sira al-nabawiya)、読み(mutāla'a
/qira'a)

註：① Dodge, *op. cit.*, p.141. ② Muhammad, *op. cit.*, pp.181-2. ③ Dodge, *op. cit.*, pp.158, 212 ④、⑤ Nor Shikin, *op. cit.*, pp.94,106 ⑥ Muhammad Yunan,
op. cit., pp.15, 45 を元に筆者作成。

育省の統一試験に対応するカリキュラムを平行して実施することを決定した。これにより、従来の学校単位での修了資格は廃止され、教育課程も6年制に改編された。

マアハド・ムハンマディーは州の中心的マドラサとして前項で挙げた例と同様、他の民間により運営されるマドラサのモデルとされてきた。また、後期中等段階の宗教教育を行うマドラサは少なかったため、他のマドラサで中等段階まで終えた学生を受け入れており、マアハド・ムハンマディーへの進学および将来のアズハル留学を可能にするため、クランタンの民間の宗教学校のカリキュラムも自主的に統一が進んだ。

3-3 事例3 マアハド・イル=イフヤとペラの宗教学校

マレー半島西海岸中部のペラ州にあるマアハド・イル・イフヤ(1940年に「マドラサ」から「マアハド」に改名)は、1934年にアブ・バカル・アル・バーキルによって設立された近代的形式の宗教学校であり、事例1のマドラサ・ナフダと同様に、民間の支援のみによって設立、運営された。前身は1918年にアズハルとメッカで学んだ経験を持つウラマーによって設立されたポンドックであり、アブ・バカルはここで6年間学んだ後、ペナン州およびペラ州のマドラサにてメッカで長期の教育を受けたアブドゥッラー・ファヒム⁴³(1879-1961)に師事した。彼がペラ州で学んだマドラサ・イドリシーヤは、ポンドック的要素を多分に残しながらも9年間の学年制、試験および新しい宗教科目等を備えた近代的宗教学校であった。アブ・バカルはここで師の助手を務めながら、頻繁に出身地に戻り、地元の有識者たちにポンドック・ラフマニーヤをイドリシーヤのような近代的宗教学校に変える必要性を説いた。その結果、人々の同意を得て1934年にマドラサ・イル=イフヤを開き、これに伴いポンドック・ラフマニーヤは閉鎖された⁴⁴。

イル・イフヤは、1939年までに準備課程(*kelas tahdiri*)2年、初等(*ibtidai*)4年、中等(*thanawi*)3年、高等(*kismul ali*)4年、専攻科(*takhassus*)2年からなる教育課程を持ち、各学年のキターブと教育内容が定められ、試験による進級が行われた。教授言語は、準備課程のみマレー語で、初等以上はアラビア語とされた。イル・イフヤの発展に貢献した教師には、8人のメッカ留学経験者、4人のアズハル出身者とマラヤやインドネシアの宗教学校出身者がいた。特に1939年の専攻科の設立に際しては、アズハルの影響を強く受けたインドネシアのイスラーム高等教育機関出身の教師たちが主要な役割を果たした⁴⁵。しかし第二次世界大戦の打撃と、その後の政治運動の活発化による代表者の逮捕などにより発展が一時遮られた。1953年以降、イル・イフヤは政治運動への直接的関与を止めたため、ペラの宗教局(Pejabat Ugama)との関係が改善し、補助金を受給するようになった。

手工芸や英語などの教科が追加され、1955年にマラヤ・イスラームカレッジ(KIM)が設立されると、それを「標準」として9年間の教育課程が整備され、6年でKIMへの入学、9年で中東の大学への進学を可能とすべく、カリキュラムが整備された。1959年に教育省の統一試験に準拠して非宗教科目が大幅に取り入れられて以降は、上の二例と同様に教育省カリキュラムとアズハル準拠の州宗教局カリキュラムを並行する、標準的宗教中等学校となった。

4. おわりに

以上では、1930年代頃からメッカに変わってアズハルがマラヤからの留学先として主流化し、それに伴いマラヤ各地の宗教学校がアズハルの教育制度、カリキュラムを参照することで自発的な標準化が進んできたことを述べた。各州におけるアズハルを基準とするカリキュラムの整備はクダー州やクランタン州の事例に見るように、州の統治者や公的宗教機構の支援を受けた中心的宗教学校によって先例が作られ、州内の民間の宗教学校が自主的にそれに従う形で進む場合もあれば、イル・イフヤの例に見られるように民間の宗教学校が独自に新しい形式を発展させる場合もあった。

20世紀のイスラーム世界各地からのアズハル留学は、近代イスラーム改革主義やムスリム同胞団のイスラーム復興運動などのイスラーム主義運動のみならず、ウラマーのナショナリズム、独立運動への関心を高める役割を果たしたことがすでに指摘されてきた⁴⁶。ウラマーの国際移動を通じたこれらの思想や運動の伝播は、植民地政府であれ国民国家政府であれ、政権にとって脅威となりうるものであり、多くの場合政権はこれらのウラマーの自由な活動を制限する方向に動く。しかし一方で、アズハル大学への留学の主流化は、アズハルへの進学を目標とする宗教教育の近代化、アズハルを基準とする自発的標準化を導いたことが本稿で明らかになった。

このことは、知識伝達の証明として師の個人名において発行され、預言者ムハンマドに連なる知の伝達の鎖(シルシラ)をつなげて行く機能を持った修了書(イジャーザ)に代わり、国家の教育制度によって標準化された修了資格、学歴によるウラマーと知識の権威の証明が重視されるという変化を不可避免的に含んでいる。この過程において、イスラームの知もまた、統一試験によって測られ、就業などの有用性によって判断されることになる。アズハルの近代化において顕著に見られたこのような変化を Eccel は官僚制化と専門職化を鍵とする「世俗化」として論じたが⁴⁷、マラヤではアズハルの権威の下に、このような「世俗化」過程をも宗教的な「発展」の過程と理解して受け入れたと言える。こうして、マラヤにおけるアズハル留学の主流化は、国際的なイスラーム運動を活性化させると同時に、

イスラーム知識伝達を国家の教育制度に組み込みやすい形へと整え、ウラマーの国家管理と国家への依存を促進させたという一見矛盾する方向性を内包することとなったのである。

註

- ¹ マレーシアにおいて「宗教学校 (sekolah agama)」はイスラームに限定される。
- ² 例えば以下の先行研究がある。G. Starrett, 1998. *Putting Islam to Work: Education, Politics, and Religious Transformation in Egypt* (Berkeley: University of California Press); Louis Brenner, 2001. *Controlling Knowledge: Religion, Power and Schooling in a West African Muslim Society*, (Bloomington: Indiana University Press).
- ³ 例えば Mona Abaza, 1994. *Islamic Education, Perception and Exchanges: Indonesian Students in Cairo* (Paris: Cahier d'Archipel); Louis Brenner, *op. cit.* など。
- ⁴ William Roff, 1967. *The Origins of Malay Nationalism* (Kuala Lumpur, Oxford University Press); William R. Roff, 2009. "Indonesian and Malay Students in Cairo in the 1920s" in *Studies on Islam and Society in Southeast Asia* (Singapore: NUS Press).
- ⁵ Mohammad Redzuan Othman, 2005. *Islam dan Masyarakat Melayu: Peranan dan Pengaruh Timur Tengah* (Kuala Lumpur: Penerbit Universiti Malaya).
- ⁶ 「ハラカ: halaqah (M), ハルカ: halqa (Ar) 以後ハラカに統一」はマスジドの一角や個人の家などで教師を囲んで学習者が車座を組み、学習や議論を行う、伝統的な知識伝達の形式である。
- ⁷ A. S. Salamon 1988. *Azhar and Politics*, Kuala Lumpur: Al-Rahmaniah, p.150.
- ⁸ Bayard Dodge 1961. *Al-Azhar: A Millennium of Muslim Learning* (Washington, D.C.: The Middle East Institute), p.209, p.162, 209-210 pp.132-3, A. S. Salamon, 1988. *op. cit.*, p.62.
- ⁹ 本稿における原語のカタカナおよびローマ字表記は、アラビア語、英語として表記する場合はそれぞれ (Ar) (En) と記載し、特に記載のないものはマレー語の発音及び表記に従う。
- ¹⁰ Eccel, *op. cit.*, p.281.
- ¹¹ Dodge, *op. cit.*, pp.140-1、カリキュラムについて表を参照のこと。
- ¹² *Ibid.*, pp.143-7.
- ¹³ Dodge によると、実際に「大学」となったのは 1936 年のことである。 *Ibid.*, p.149.
- ¹⁴ Eccel, *op. cit.*, p.280.
- ¹⁵ Muḥammad ‘Abdul Mun‘im Khafājī, 1987. *al-Azhar fī Alfi ‘Ām: al-Juz‘u al-Thānī*, Qāhīrat: Maktabat al-Kullīyat al-Azhar.
- ¹⁶ Eccel, *op. cit.*, p.279、表参照。
- ¹⁷ Dodge, *op. cit.*, p.166.
- ¹⁸ Qānūn al-azhar al-jadīd li ‘ām 1961 in Muḥammad, *op. cit.*, pp.222-3.
- ¹⁹ ポンドックの学習やトググルの性質については、拙稿(久志本裕子 2010 「マレーシアにおける伝統的イスラーム知識伝達 — 構成要素と学びの意味 —」、『イスラーム世界研究』、

-
- 京都大学、第3巻2号、pp.255-292)に詳細を記した。
- ²⁰ マレー世界とは、本稿では特にマレー語によるイスラーム知識の流通が重要な役割を果たした地域を意味し、現在のタイ南部、インドネシア各地等を含めるものとする。
- ²¹ Ahmad Zain al-Fatani (1856-1908)はメッカのマスジド・アル・ハラームでの教授や出版社の運営など幅広く活躍した東南アジアで最も有名なウラマーの一人である。
- ²² Sheikh Tahir Jalaluddin (1869-1956)はスマトラ島出身でメッカとアズハルに学び、マレー半島で教育、宗教行政などにおいて活躍した。詳細は Roff 1967, *op. cit.*, p.61.
- ²³ Eccel がアズハルの資料に基づいて求めた国別留学生数によると、マラヤの留学生は以下のとおりである。〈年(マラヤ [マレーシア] 人数/全体人数)〉1958(40/2,527), 1959(70/2,788), 1960(77/2,930), 1961(113/3,016), 1962(110/2,725), 1963(140/2,884), 1964(180/3,627), 1972(199/2,500)。ただし、1964年以前は初等・中等・高等教育の全てを含み、1972年は高等教育のみ[Eccel, *op. cit.*, pp.300, 304-5]。このデータはワクフ省 (Ministry of Awkaf and al-Azhar Affairs) の資料に基づいているが、留学生が必ずしも全員アズハルの奨学金を受給していたのではないため、実際にはこれより大分多い人数がいたと考えられる。
- ²⁴ Mohammad Ridzuan, *op. cit.*, pp.119-129, Nabir Abdullah. 1976, *Maahad il Ihya Assyariff Gunung Semanggol 1934-1959* (Bangi: Jabatan Sejarah Universiti Kebangsaan Malaysia), p. 31.
- ²⁵ トルコでは教育制度の近代化や宗教制度の国家管理がエジプトより早期に進んでいた。
- ²⁶ Eccel, *op. cit.*, pp.295-6.
- ²⁷ 例えば、クランタン宗教委員会の発行する雑誌“*Pengasuh*”には、優秀な学生を州の補助金で送るべき先としてイギリスとエジプトが挙げられている。(*Pengasuh* 53, 15 Aug 1920)
- ²⁸ Roff, *op. cit.*, p.134.
- ²⁹ 例えば“*Pelajaran di tanah Melayu (cakap sahaja)*” *Pengasuh*, Bil.17, 3 Mac 1919.
- ³⁰ Abdullah Muhammad Zin (et. al.) (eds.) 2005, *Pendidikan Islam di Malaysia: dari Pondok ke Universiti*, Selangor: Lembaga Bersekutu Pemegang Amanah Pengajian Tinggi Islam Malaysia, pp.37-51.
- ³¹ *Ibid.*, p.52
- ³² この頃アズハルの側では、1952年の自由将校団革命以降、留学生への奨学金を増加し、特にアジアからの留学生が急増している。Eccel, *op. cit.*, p.297. 留学生用の準備過程 Ma ‘ahad Bu‘ūth (初等、中等、高等各4年)も設立された。Dodge, *op. cit.*, p158, 221. また、1962年には初めて女性用のカレッジが設置され、70年代以降には女子留学生の数が急増した。
- ³³ Nor Shikin Hassan, 1982. *Sejarah Maktab Mahmud Alor Setar, Kedah*, (Bangi: Universiti Kebangsaan Malaysia, Latihan Ilmiah Jabatan Sejarah UKM 1982/83).
- ³⁴ “Purchase of Arabic Books for Boys in Madrasah Limbong Kapal” 413/1339, 1922, Arkib Negara Malaysia.
- ³⁵ *Majalah Maktab Mahmud*, 1954. h,11-12 in Nor Shikin, *op. cit.*, p.106.
- ³⁶ マレーシアの中等学校は、前期中等教育3年 (Form1~3)、後期中等教育2年 (Form4~5)、中等後教育2年 (6年上と6年下)からなる。また、宗教学校の場合90年代半ばまでは1、2年の準備過程を持つことも多く、実際は7~8年の教育となるが、基本は6学年なので「6

年制」と記述する。

- ³⁷ Nor Shikin, *op. cit.*, pp.111-2、教科については表を参照。
- ³⁸ マドラサ・ナフダについての記述は筆者が行った現地調査(2006年3月-2007年7月)に基づく。詳細は拙稿(久志本裕子「マレーシアにおける伝統的イスラーム学習の変容」『比較教育学研究』東信堂、第40号、pp.44-65、2010年)に記した。
- ³⁹ Majlis Agama Islam dan Adat Istiadat Melayu Negeri Kelantan, 1917. *Penyata Tahunan (Annual Report) 1917*, pp.50-51, *Penyata Tahunan (Annual Report) 1918*, p.11.
- ⁴⁰ Sayid Abu Bakar al-Attas はイエメンのハドラマウトで教育を受け、ジョホール州のマドラサアル・アッタースの校長を務めた。他二名もそれぞれメッカ、アズハルへの長期留学経験を持つ。Muhammad Yunan Mahmood, 1997. *Sejarah Maahad Muhammadi 1937-1997*, Kota Bharu: Maahad Muhammadi Lelaki, pp.7-9.
- ⁴¹ *Ibid.*, pp.11, 31.
- ⁴² *Ibid.*, pp.45-52.
- ⁴³ マレーシア第5代首相の祖父であるAbdullah Fahim は、メッカに生まれ学問を修めた後1916年にマラヤへ渡り、マドラサ・ハーミディーヤで10年間教えた後、1927年にペナン州でマドラサ・ワタニーヤを開いた。
- ⁴⁴ Nabir, *op. cit.*, pp.29-36.
- ⁴⁵ 出身校には例えば西スマトラのタワーリブ学校(Sekolah Tawalib)や、イスラミック・カレッジ(Islamic College)がある。Nabir, *op.cit.*, pp.60.
- ⁴⁶ Roff, 1967, *op. cit.*
- ⁴⁷ Eccel, *op. cit.*, p.320.

付記：本稿は平成21年度日本学術振興会優秀若手研究者海外派遣事業による研究成果の一部である。

Mainstreaming of Study at al-Azhar and Modernization of Islamic Religious Schools in Malaya

Hiroko Kushimoto

Graduate School of Area and Culture Studies, Tokyo University of Foreign Studies

Abstract :

This article aims to show how the modernization of al-Azhar and the mainstreaming among Malay Muslims to study at al-Azhar related to the modernization of Islamic religious schools in Malaysia(Malaya)in mid-20th century. Al-Azhar as the center of knowledge of Sunni Islam has attracted huge number of foreign students for centuries and many studies has done on the role of them. While many of those studies focus on the formation of international networks or the transmission of ideas, little has been done on the influence of institutional transformation of al-Azhar on the Islamic religious education in the other part of the world.

Modernization of religious education was often done as crucial tool to control religion for governments, either colonial or modern nation states. One of the main motivation for modernization of al-Azhar was also the will of the government to control religion and religious scholars (ulama). However in the case of Malaysia, the government succeeded the British principle of noninterference to the Islamic religious schools until 1960s. In spite of this noninterference, many of the private Islamic schools led by individual ulama voluntarily transferred the religious studies into the form of modern schools by taking al-Azhar as their model. This voluntary transformation following al-Azhar was caused by the increase of the number of Malay students continue their study in al-Azhar and of the popularity and authority of al-Azhar in the Malay society. The modernization of Islamic religious school followed al-Azhar model was a result of the expansion of international movement of people and idea. However it also worked as preparation for active interference and control of the government after late 1960s such as unification of curriculum and nationalization of religious schools.

Keywords : al-Azhar, Modernization, Study Abroad, Malaysia, Islamic Religious School